
いななき

第 14 号



1995

青山学院大学体育会馬術部・緑鞍会

目次

第二部 現役より

第一部

「いなぎ」発刊のちうて・緑鞆委員長 青木昇 昭16卒 …… 1

部長接抄 …… 高森 寛 (国際政治経済学部教授) …… 3

高等部部長接抄 …… 清水 正 (高等部主任) …… 3

緑鞆理事部長接抄 …… 新城貞樹 昭28卒 …… 4

監査員接抄 …… 六平 潔 昭46卒 …… 4

コト接抄 …… 高柳徹二 平5卒 …… 5

第二部 思い出がいっぱい (OB寄稿)

馬術部 私の時代・羽坂尊司 …… 6

青山学院大学理事長・昭16卒 …… 6

関東女子学生馬術連盟設立 …… 7

第二回関東女子学生馬術競技会について・梅全子 昭31卒 …… 7

亡き中野昭十郎氏を悼んで …… 大倉孝子 昭32卒 …… 8

思い出の馬 …… 山嶋 透 昭45卒 …… 8

思い出の二頭 …… 林 哲哉 昭52卒 …… 10

思い出の二頭 青冠 …… 糠谷 拓 昭56卒 …… 11

思い出の二頭 …… 佐々木真美 昭60卒 …… 12

旧主将接抄 …… 18

新主将接抄 …… 18

高等部馬術部主将・副主将接抄 …… 18

部員紹介 …… 20

馬匹紹介 …… 25

活動予定 …… 33

試乗結果報告 …… 34

編集後記 …… 35

名簿

「いななき」 発刊にあたって

緑鞍会会長 青木 昇

青山学院創立百五十周年の記念すべき年に、「いななき」発刊を企画されたことは誠に賞讃のめりです。

又馬術部は大正十一年創部になり、七十年余の歴史を数えますが、その時代時代、現役が、馬術を通して汗と埃と涙を共にし、苦楽を分かち合っていました。

第二次世界大戦前の学校は、学生の数も現在と比較にならない程少数であったので、学校と学生の距離は非常に短かく、教授陣と学生とは常に話し合う機会がありました。然し今日の様に各学校共々マンモス化していると、学校と学生との接点が希薄になり、ゼミナールに属するか、クラブ活動でもしていなければ、卒業と同時に学校との繋がりが切れてしまい、折角大切な青春の四年間が空回り化してしまふ恐れがあります。その上馬術部は卒業と同時に緑鞍会員となり、現役との交わりを通して常に学校との関係を保ち、先輩後輩の親睦を深めることが出来ます。

緑鞍会々員諸兄弟は常々現役を後援して居られますが、今後も許す限り現役に手を借っていたいと思っております。

今日の馬術部がもめるのは、学校当局の配慮は勿論ですが、諸先輩に負ふ処は大です。特に馬術部に特筆すべき貢献された故青木其次氏の功績は、未永く伝え続けたいと思います。多くの私財を部の為に提供され、馬匹の養育向上に、コート陣及び部員の強化に心血を注がれ、若手馬運野市の曲家を借り上げて、合宿場として使用されたことは、緑鞍会の真摯の証として新しく存じます。

又青木真次氏顕彰及び現役表彰の為、青木真次基金の計画をお話したところ、ご遺族の方のご賛同を得て、五百万円のご香贈がありました。又緑鞍会々員の方々よりもご寄付を受けて居りますが、未だ目標額に達して居りません。会員各位のご協力の程お願い致します。当基金を発展させ、緑鞍会と現役との絆が一層強力になることを願います。現役諸君も青春の日の証を、馬術部の伝統に新しい一頁を加える為に努力していただきたいと思ひます。

(昭16年卒)

(注) 青木真次基金「送金先宛名

さくら銀行銀座支店

普通預金 3710605

青山学院馬術部緑鞍会 会長 青木 昇

「馬を忘れられない人々」

馬術部部长 高森 寛

青山学院での大学生活を、馬とのかかわりなしには、語れない方々。それは、緑鞍会の皆さんのごとですが、お一人お一人から、当時の微笑ましい、また、懐かしいお話をうかがっているうちに、わたしも、いつしか、心が打ち解け、なごんできます。

青木昇会長や羽坂勇司氏、阿部雄三氏らが学ばれた大正時代の青山学院とこのころの馬術部、戦後の窮乏時代は、馬に食べさせるものがなくて、草刈りをしたり、おソバやさんにソバツユをもらいにいった話。競技大会に馬を運ぶときは、いつも、自分たちで馬に乗って連れていったという悠長なお話、どんな気性でどんな愛称の馬がいたかなど、一つ一つのお話から、それぞれの時代の部員のみなさんの交遊、馬への思いやり、学生かたぎから、生活水準や世相まで、手にとるよつに伝わってきます。

現役の部員たちの馬術部生活を見ていると、やはり、彼らにとっても、忘れ得ない日々になるに違いありません。

毎朝、夜明けの星空のもと、家を出て、馬場に集合し、みんなで馬の世話をしてから授業にでかける。飼料購入のためのアルバイトにも仲間と交代で行く。生活を大きく投じて、自分たちをも、馬をも切磋琢磨していく。これはスポーツというよりは「道」と言ったほうがいいかもしれません。馬と対話し、可愛がりながら、馬と共にわざを磨き、仲間達と苦労を担いあって、一緒に成長していく道であるよつに見えます。

いつか綱島の馬場に行ったとき、ひとりの女子部員が馬の鼻つらに自分の顔を押し付けるよつにして、馬に話しかけているのを見て、そのよつに思い、また、馬術の深さを感じました。

このような生活から芽生えた思いやりの心、堅忍不拔の魂は、人生を通して、衰えることがないに違いありません。

(国際政治経済学部教授)

高等部馬術部顧問として

高等部馬術部部长 清水 正

十年前に高等部の馬術部の顧問になるよつにいわれて、現在に至っている。馬には乗れないので、大学馬術部の御指導に全面的に頼っている現状である。

高等部の馬術部は綱島の馬場で活動するため、大学馬術部の支えなしには存在しえないし、それだけ大学生の皆様の献身的と言ってよい程の協力を必要としている。このような無償の協力をいただけるのも青山学院の一貫教育の一つのあらわれといえると思う。

高校生活の中のクラブ活動という面から考えると、大都会の機械化され、人工化された環境にあつて、まさに生きた自然に触れ、しかも、心を通わせ意志を伝えることよつて成り立つ馬術は、現代で最も欠けている生命との出会いを経験できる貴重な活動であろう。高校時代の多感な時期に馬との出会いを経験し、また大学生の指導の下に作業を行つ

ことは、得がたい人生経験となると思ふ。高校生の部員の中で大学に進んでからも活動を続ける者はあまり多くはないが、それでも何人かは大学でも馬術部に所属して、高校生の指導に当たつて下さることは心強いかぎりである。今後ともよろしく申し上げる次第であります。

(高等部宗教主任)

緑鞍会理事長挨拶

緑鞍会理事長 新城 直樹

久しぶりの「いななき」の発刊に際し、一言ご挨拶申し上げます。

お陰様にて当緑鞍会も会員参加の行事が多くなり、卒業以来の顔触れが揃つ様になつて参りました。

この会の目的は、学生時代の楽しい過ぎ去つた思い出を、社会人となり亦定年後の人生に於いてもあの頃に戻つて懐かしく語れる親睦の場として成立したもので、青山学院の卒業生で馬術部に籍を置いた者であれば全て会員として構成されます。

学校を出て社会人となりますと、地方に帰り実家の仕事を継いだり或いは勤務の関係から地方に行つてしまい、東京での会合には、中々出られず、つい何年もの間皆に会う機会を失つてしまい、集まりの通知が来ても何となく出不精になつてしまつてあると思ひますが、どうかその時に昔の仲間と会いに行くんだという軽い気持ちでご出席下さり、会を盛り上げていただければ幸いです。

毎年の行事運営は、卒業したての方から二十五年過ぎた方々の会員にて幹事会を結成し、この方々の努力でいろいろと行つて居ります。わたくしども理事会は、この幹事の方々が動き易いようにその手助けをするべく待機しているつもりです。

毎年五月には総会を行い幹事を決めて居ります。労多くしてなんの報いもない仕事ですが、あくまでも会員各位が喜んで出席し楽しめる会にしたいと思つて努力して下さる幹事の方々には心より感謝して居ります。

今後この緑鞍会の発展の為に皆様方のお力添えをお願いしたいと切望致して居りますので宜しくお願い申し上げます。

「いななき」を通し会員皆様方に対し心より御礼申し上げます。

(昭28年卒)

監督挨拶

馬術部監督 六平 潔

馬術部緑鞍会全会員の皆様方には、益々ご活躍の事とお慶び申し上げます。

日頃は現役部員のために、何かとご指導、ご支援を賜わり有難く厚く御礼申し上げます。

さて、昨年度は関東学生馬術協会の20周年記念行事(羽坂理事長が馬術功労者として表彰されました)の実施に始まり、10月には広島アジア

大会への協力（障害場、馬場馬、頭を貸与）など、大変忙がしい一年間でした。

このような中で、田中ヘッドコーチをはじめとするコーチ陣、辻本主将をはじめとする現役も、大いに頑張ってくれた結果、全日本学生馬場馬術大会団体3位、全日本学生障害飛越競技大会団体5位、関東学生女子競技大会馬場馬術団体優勝、個人優勝、総合団体2位など、すばらしい成績を残す辛ができました。有難うございました。

ところで先日、高等部馬術部の件で高等部へうかがい、志賀高中部長、山内教頭へごあいさつして参りました。席上志賀先生は、最近礼節をわきまえない生徒が多くなったと話しておられました。一方、体育全馬術部では、あいさつを含めてきちつと部活が行なわれている点をお話したところ、理解を示され、今後とも高等部馬術部への協力をよろしくと依頼があり、大学馬術部への期待の大ききさを感じました。本年は、高等部卒業生の大学馬術部入部も数名予定されており、楽しみにしている次第です。

世界の政治、経済状況が激動のさなかですが、青子馬術部は一丸となって伸びていきたいと考えております。

今後ともよろしく指導、ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

（昭46年卒）

コーチ挨拶

高柳 徹三

僕が馬術の世界に足を踏み入れたきっかけは、中学二年生の頃のことでした。

体格的にも体力的にも恵まれていなかった僕は、小中学校の時体育が苦手で、体育の授業がある日はとても憂鬱でした。しかし、中学三年生の頃体格的に恵まれない人でもできる競馬の世界について知りました。それから馬に興味を持つようになりすぐに競馬学校の資料を取り寄せましたが、両親の反対に遭い断念しました。高校二年生の時に親の反対を押し切つてようやく馬術部に入ることができました。

ヘッドコーチの田中さんとの出会いは僕にとって大きな人生の転機でした。田中さんに指導を受け、僕は馬術の魅力にとり憑かれていきました。そしてこれが天職だと思い乗馬クラブに就職しました。

田中さんに馬術部のコーチを頼まれた時は僕に務まる仕事なのかと悩みましたが、田中さんはヨーロッパ遠征等で忙しく、今こそお世話になった馬術部と田中さんへの恩返しにチャンスだと思い引き受けました。

今後は「田中さんがいなくても高柳がいれば安心だ」と言われるぐらいになりたいと思います。無理かな……。

（平5年卒）

思い出がいっぱい

馬術部 私の時代

羽坂 勇司

本年は、学院が創立された明治元年から数えて120周年にあたり、種々な記念行事が計画され、皆様のお陰をもって、ほとんどの行事を終えることができた。心から感謝している。

私が学院で学んでいたのは60年ほど前、約9年間在学していたので、⁸⁰年間の出来事が、私の頭に焼きついていて、あたかも走馬燈を見るかのごとく現れてくる。

本来、私の卒業は昭和17年のはずが、第一回目の繰り上げ卒業により、前年の12月となり、情報と言えば新聞とラジオ（短波は禁止）から得るのみであった。卒業試験を受けていた12月8日、日本は米英に宣戦を布告して太平洋戦争に突入、私はその後方召集を受け、南方の地に向かったのである。

在学していた当時、東横百貨店（現東急）が完成、銀座まで地下鉄が開通した。馬術部の部屋は現在のウエスレーホールの裏あたりで、練習は専ら渋谷から玉電に揺られて大橋で下車、駒場にあった陸軍の練兵場か、若しくは市ヶ谷の陸軍士官学校の馬場で行った。練習の帰りには決まって東横七階の食堂が、八千公前の東京パンに寄ったものである。ど

うしてかキャブテンのさんが行くと、黙ってトーストとコーヒーが出てきたものだ。当時、仁丹ビルあたりにあった「三好野」の和菓子が六つで10銭、喫茶店のコーヒー二杯が7〜15銭、学生はダンスホールやカフェーは出入りが禁止、髪は丸坊主で、服装は上下共学生服であった。堀に囲まれた女学部以外、校内に女子の姿は全くなかった。校内での喫煙は教師と雖も禁止、学生は見つかれば停学である。休み時間の正門前は蜂煙が上がっていた。追い詰められた時代であったが、青山学院には自由な雰囲気が残っており、楽しい学生生活であった。

私は多くのことを馬術部の生活の中から、教えられ与えられた。人と人との絆は、困難を経験すればするほど強固なものとなる。青山学院を通して築き上げられてきた友情と、そして絆は、今までの自分に量り知れないほどの励みとなり、幾つもの思い出を残してくれた。

同一年齢人口に占める高等教育就学率を比較すると、当時2〜3%であったのが、現在は40%を超えている。それだけに現役諸君にとっては、私達が過ごした時代と別な意味で、困難な時代を経験しているのかも知れないが、平和で、そして街中には物が溢れ、若者は自由を満喫している。現役諸君には、その様に恵まれているという自覚の中で、学生生活あるいは、馬術部での生活を通して、しっかりとものを掴んで欲しいと思う。

老人が昔のことを言い始めると、ポケの一步手前なのだそうだが、青山学院の責任を担う者の一人として、これからも諸兄姉と共に青山学院の将来を考えて、少しでも進歩するよう努力したいと思っている。

（青山学院理事長 昭16年卒）

関東女子学生馬術連盟設立と第一回 関東女子学生馬術競技会について

梅本 元子（昭31年卒）

昭和二十九年青学馬術部女子は、二年、平木、福原、梅本、一年、松居、小野塚、伊東諸嬢。馬数も増え、ますます華やかに充実していった。その頃、第一回対学習院戦が学習院馬場で行われ、青学が優勝した。ために、我が女子部員の馬術に対する情熱は大変エスカレートしていったのである。余談だが、この試合には当時学習院大学生であられた皇太子（現大皇）も観戦あそばされたのである。

当時の女子馬術は全般的には初歩的段階にあり、男子の関東学生馬術連盟に相当する組織も存在せず、まして女子のみで日頃の練習の成果を競い合う競技大会の開催など夢の又夢という時代であった。この夢を実現すべく私達は行動を起したのである。

始めに、各大学馬術部に呼びかけ、女子部員にお集り願った。早稲田、慶応、中央、法政、成蹊等から約十名の参加を得た。この時積極派、消極派、意見は様々であったが結論として、まず関東女子学生馬術連盟を設立すること、会長の選任、そして第一回競技会開催の実現を達成することが決議された。青学は発起人として活動する事となったのである。

この後、平木、梅本は会長を引受けて戴ける方を探すため、先輩諸氏、馬術界の著名人をお訪ねし、「ご意見」「忠告等拝聴して、この役目が大変困難なことを思い知ったが、この時、馬術界の大先生である遊佐氏に

お目にかゝれたことは幸いであった。

当時、東京駅に関西系デパート大丸が初の東京進出を狙ってオープン準備中であった。一瞬、ひらめいて、私達はこのデパートの店長氏を訪ね、幸運にもこの時対応された女性秘書の正に賢い判断のおかげで紹介状もなかったが店長にお会いする事ができた。美しい舞妓さん連も同席し私達の馬術への夢と目的を熱心にきいて下さった方、そして連盟会長も引受けて下さった方が田中正佐氏であった。この方は関西の有名な若手財界人であった。その後、連盟設立の事務的手続、又会長就任の挨拶状発送等、私達、未熟な学生には考えもしなかったことを会長は全部実行して下さり私達には後で教えて下さったのである。競技会開催の費用も会長が調達して下さったと記憶する。その後、会場の設定、プログラム作成等、開催に至るまでの経過は本場に「学生身としては大変な事であった。

昭和30年3月13日（日）、馬事公苑に於いて参加校九校、総勢20名の女子学生により、トーナメント式障碍飛越競技と部班運動競技が行われた。天気晴朗、正に華々しい第一回競技会であった。障碍競技優勝校、慶応部班優勝、平木、私は三位になった。当時としては多くの報道機関にインタビューされ困ってしまった事を覚えている。翌日の主要新聞には初の女子学生馬術競技会として記事となっている。

最後に、今日の女子学生馬術の隆盛をみる時、約40年も前の私達の努力がこの様に実った事を誇りに思い、万感胸にせまる思いである。「協力」「指導戴いた多くの方々に深い感謝を捧げたい。

亡き市原昭十郎氏を悼んで

大島 孝子（昭32年卒）

昭和二十八年四月入学式を終えて青山学院には馬術部があると聞いていたので馬房を探した。校庭の端にそれらしいものを見つけて入部をつづけた。その時の馬匹は青峰、青兎（足をいたために入部後すぐ退屈した）、青妃の三頭であった、私が入部して一週間後丸い目鏡の男が入ってきた。その当時鼻薬の新聞広告に出ていたミナト式のイラストそっくりの男でミナトさんと云おうと心の申で思った。

九州の出身で同じ商学科の「組」ということでよく話もした。その彼こそ市原君であった。練習も学院内の猫の額のような馬場で二頭の馬匹で練習をした。彼は落馬の名人で練習中一鞍乗る中で数回落ちた。しかし落馬をしながら技術を上げていった珍しい男でありました。当時練習馬場がテニスコートとなるという学校側の意向が出た。その時彼市原君は体育会へかけあつて運動場の中で練習が出来るようになった。しかしながら当時の校庭は野球部、サッカー部、ラグビー部も同時に使用していた。そのため馬術部は目の敵となった。特にラグビーの部長であった数学の教授からは散々いびられた。その原因が馬糞でタックルするとそこにボロがあつた。その為数学は馬術部の者は落第で追試のハメとなつた。そこで又彼市原君の出番となりラグビー部、サッカー部の渡りをつけ両部の選手と友達つき合いが出来る程になつた。彼が昨年亡くなり追悼文集を奥様が届けられたが彼が教会の子供達の面倒を良く見て、又教会の

人達からも慕われたとの言葉で通されていきました。私は彼の生来の気持がそこに表われて大変嬉しく思いました。

無の中から我々の当時の馬術部は出発し、卒業時には六頭の馬匹を保有出来る程になり関東学生の中で青山学院大学の名が認められたのも当時の部員はもとより、主将として引つ張つて来た市原君の努力が光つていたことは言つまでもありません。

市原昭十郎君は亡くなつても当時の学院の馬術部の部員の中に心の燈火となつて残っています。

他人の為に自分の全知全身で尽したパウロ昭十郎さん、神の世にあつても此の世の中で発揮した君の心が神様に認められ神様のために全知全身で尽していると思つています。

想い出の馬

川嶋 透（昭45年卒）

「想い出の馬」の原稿依頼が回り回つて私の所へやつてきた。断り切れなくて引き受けてしまったのだが、~~20~~年も前の事で記憶も薄れてしまつている。また、多忙な身でもあるし、現役時代に華々しい活躍をしたわけでもないの、引き受けたことを悔やんでいたが、現役の弥登さんの度重なる熱心な催促で、重い腰をあげた次第である。

私は、昭和41年に入学したのであるが、大学へ入つたら何かクラブ活動をしたいと思つていた。できればスポーツ部と思つていた。しかし、

大学のスポーツ部ともなれば、高校時代にみっちり活動してきた者でない、入部してもついていけないのでは、と考え、高校にはあまりないスポーツ部を幾つかピックアップした。そこで、動物が好きであったのと、カッ「良」と、もつひとつ、たまたま部室を訪問した時に出会った女子の先輩（なぜか年下であったのだが）が、すぐ近くに住んでいたということが決め手となり馬術部に入部したのである。そこで初めて「馬」というものに接したわけである。馬も動物であるから「ワン公」の様に扱えば、訳は無いなどと簡単に考えて接したのであったが、それとはんでもない考え違いであった。なにせ、ばかデカイ上に力が強く頭が良くって、人を小馬鹿にするのであった。「馬鹿」といふ字に、馬が入っているのは、そついったことからきているのかもしれない、などと思ったりした。犬であれば、エサを持って行けば、ワンワン吠えて尻尾をちぎればかりに振って喜びを表現するのだが、馬ときたら、エサを持っていつても知らん顔、ひどい奴になると、エサを持って来た恩人に対し、歯を剥き出して噛みつきに来る奴もいる。エサを食べ終わったら、その飼葉桶に、ご丁寧にポロ（糞）を入れておくひどい奴もいた。それでも、可愛い時もある。それは、キュロットのポケットに鼻づらを押し当ててくる時だ。甘えていると言えなくもないが、どうやらニンジンをおねだりしているのだ。練習が終わって引き馬をして、草を食べさせる為（本当はタバコを吸いに行くのだが）よくグラウンドへ連れていった。そこで、引き馬の最中にいきなり背中に噛み付いて来る奴もいた。それでも、世話をしていると段々愛情が湧いてくるものだ。とにかく、目が可愛い。ウンともスンとも言わなければ、なんでもちゃん

と知っているのだ。馬を世話していて、一番感じたことは、雄と雌の違いであった。特に、雌は女らしく、動作も性格も雄とは違っていて、人間の女より女らしく可憐であった。

二年生の冬であったと思うが、乗馬クラブから一頭の牝馬（雌）を購入した。練習馬としても使えるし、中障害くらいは、こなす能力があると言つ触込みであった。その馬は、私の馬匹と決まった。もちろん入部して初めてもらう新馬であった。なにせ、上級生の男子はたった一人、三谷キャプテンだけであったので、二年生の私にも、新馬が与えられたのであった。もしかしたら、本当はオンナの扱いは川嶋に任せておけという事で決まったのかもしれない？ その牝馬の乗馬クラブでの名前は「カレン」という名であった。カレンは、青子馬術部の登録名を「青華」とした。

カレンは、鹿毛で、体高は普通であったが細身で、痩せており、今にも折れそうな細い足をしていた。気性は素直であったが、気が弱かった。大きな可愛らしい目をしてしたが、何かいつも困っているような顔にも見えた。馬場では、1mくらいの障害は、なんとか飛ぶことが出来たが、筋力もバネも不足していた。それでも、カレンに乗馬して中障害飛越競技に出ることを夢見て懸命に調教をした。そして、とうとう新馬戦に出場することが決まった。自分で調教を積んできた馬で競技に出るのは、最高の喜びである。新馬戦は、とにかくゴールを切る事が大事である。しかし、第三障害で落馬をし、第五障害で二回落馬をしてゴールすることが出来ず、失権してしまった。乗り手としての腕もさることながら、障害の直前でピタッと止るカレンの急ブレーキも見事なものであった。

そして、カレンにとって、この競技が最初で最後の競技となった。

カレンは本当に気の優しい牝馬であった。噛み付いたり、蹴ったり、暴れたりすることは絶対に無かった。手入れするのも楽であった。練習が終わって馬房に戻ったカレンは、たいがい寝臺の上で横になった。私をよくカレンの馬房に入り、寝ているカレンの首を枕にして昼寝したものであった。私が寝ている間、カレンは私を起してはいけなれないと思いつても、私が通ると、必ず向きを変えて、鼻面を向けてくるのであった。まるで犬コロの様であった。私の家へ連れていって、庭で飼いたいくらいであった。そんなカレンであったので、練習馬としては、活躍した。新人部員を乗せても、安心であった。ところが、私の調教の失敗から、駆け足の歩様に乱れが出てしまい、練習馬としても使えなくなってしまう。そして、牧場へと引き取られてしまった。馬術部にいたのは、わずか一年位であったと思つた。

今でも、あの可憐な乙女の姿が、私の胸に残っている。

「思い出のいのちの頭」

林 哲哉（昭52年卒）

大学を卒業して、もう十八年が過ぎようとしています。陳腐な表現で恐縮ですが、本当に月日の経つ速さには唖然とするばかりです。

私にとって生涯忘れぬことのできない馬・それは『ススポクサー』で

す。「北海道三オスティクス」「ステイヤーズスティクス」等で優勝し、そこそこ活躍した馬でした。その時のコーチだった高津さんが調教師の阿部先生に「私に調教をやらせて下さい」と言っておられたのをハッキリと覚えています。当時の青字の試合馬は二頭しかおらず第三、第四の馬が育つていなかったのです。その様な次第で一年程、高津さんに基礎調教をして頂きました。私が三年になった時に山本さん（現塚原令天人）と『ススポクサー』の馬匹担当となったのです。しかしこの馬の「重さ」ときたら並の「重さ」ではなかったです。鞭や拍車でも入れようものなら後肢を跳ね上げる、騎手を振り落とす、と大変でした。そうこうしている内に馬との折合いがついたのか、随分と「軽く」なってきました。しかし左の 向きの固さがとれません。網島馬場で経路を回っても左回転がうまくいかず、左肩から入って左にサーツと逃げられてしまう。こんな事の繰り返しでした。そして四年の春の競技会に山本さんが婦人障害、私が新馬障害で出場しました。先に騎乗した山本さんがナント満点（だったと思います）で帰ってきたんです！ 私が騎乗した続く新馬障害でも同様に満点でゴールできました。あの時、山本さんがいなければ、あの結果は出せなかったのではないかと今でも思っています。その後、数々の競技会に出てマズマズの成績を残すことができました。特に二回走行の初日「二逃避（相変わらず左に）」され、「心臓が止まる思い」（原野さん談・当時コーチ）でゴール。二日目は一落下で、これは難なくゴール。この競技会で星・加藤で団体が組むことができ、青字として史上はじめて団体として全日本学生障害に出場（と言われましたが、間違っていましたら御免なさい）できたことは、チョビッリ誇りに思っております。

思い出のこの一頭

青冠 「ラックスストーン」

糠谷 拓（昭56年卒）

私と馬術部との出会いは高等部の時からです。ちょっとした好奇心のつもりで馬術部の門をくぐったときからの七年間は、今思うと楽しかった思い出として甦ってきます。特に遠野（岩手県）での夏合宿は二度と経験の出来ない貴重な体験として心に残っています。

さて、私の思い出のこの一頭は、非常に気性の激しかった馬としてはこれ以上ないのではないかと思う「青冠（ラックスストーン）」号です。栗毛・四白の筋肉質の美しい馬体と少し歩調の細かい速足が印象的でした。

青冠に対して一番嫌なことは手入れと馬房掃除でした。馬匹になってからはしかたなく率先して馬房掃除をしましたが、午後当番のときなど怖くて馬房に近寄りたくありませんでした。人が入っていけば後れを向き、中々「やけい」をさせませんし、近づけば飛び掛かってきて噛みついてきます。私の左胸には当分の間、歯形がくつきりと残っていました。また、障害では気性が激しく力が強いために太勤をつけていましたがそれでも初心者には引つ掛かってしまい止まらなくなることもありました。

昭和58年（1983年）3月に関東学生馬術新人競技大会が馬事公苑で開催されました。当時、私は一年生でありました。高等部から一緒にやってきたふたり（矢作・副島）と共に出場しました。

最初私は、青雅という馬で出場するはずでしたが、練習中に変更となり青冠に乗ることになりました。その時から試合が終わるまでは試合中に引つ掛からないか心配な日々が続きました。そして試合当日がやってきました。とにかく、しがみついて経路を間違えない様に障害に真っ直ぐに向けていこうとだけ考えていました。しかし、直前の練習のときにアクシデントがあり太勤の一部が切れてしまいました。もう、頑の中は真っ白になってしまい試合にでる前にもうクタクタになった記憶があります。もう16年も前のことですが、一番印象に残っている試合です。この写真はその時の唯一残っている私にとって貴重な写真です。

この時から、どんな馬に乗っても大丈夫だという自信がつかしました。青冠が私を二皮むいてくれた様な気がします。

最後にこの時の成績は、最終障害で三反抗失権でした。

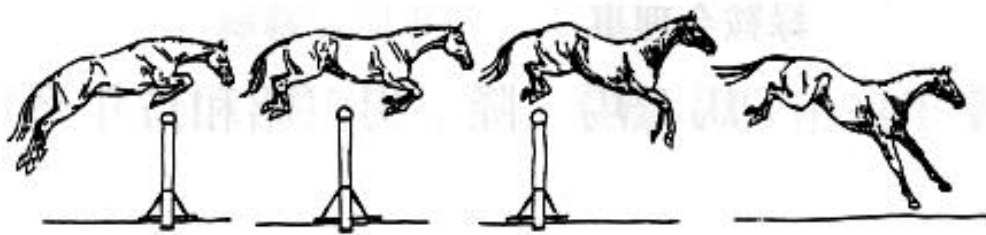
思い出の一頭

佐々木直美（昭60年卒）

私の大学時代の愛馬は、なんと言つてもエクセル号である。専修大学から来たエクセル号は、ひよろつとした栗毛で背の高い、ハンサムな馬であった。栗毛が元々好きだった私は、エクセルのどこか感情を出さないクールなところが気に入った。念願がなつて乗せてもらったところ、反動が高く大きく歩く。速歩の正反動など長く乗っていると苦しかったが、反対に駆足は雲に乗るようにフワフワして気持ちよかつたのをよく覚えている。三年生・四年生と障害の試合にコンビを組んでよく出場した。決してスピードは出ないが一定のペースでよく障害を飛んでくれた。止まらないのはよいが、ある時から右にはかりきる癖がついて満点でかえつてくるのが少なくなった。おまけに使いすぎで足にはれが来るようになり、障害を当てる落とす。私の代は女子部員が多く、ローテーションで私自身もミニ号やシンキスパ号などに乗せてもらったがやはり心の中で何としてもエクセルで満点で帰りたいと願った。折りしも女子自馬が近づきエクセルに乗れることになり、同級生の金子君にマンツーマンで練習をつけてもらい猛練習をした。まず右に切る癖をとるため右回転を中心に外を向けて前をしつかり持って回す練習を繰り返した。体の硬いエクセルは小さい回転をするのもひと苦労だった。次に障害を当てるので、田中コーチのすすめもありカンテにして飛んだ。いろいろ練習を試みたが、当日を迎えた私は、あとは馬との信頼でいくしかない

覚悟をきめた。エクセルは目に入れても痛くないほど可愛がつており、心の内をよくぶつぶつ話しかけていたから私は勝手に気持ちを通している気でいた。「愛は障害を越える」なごとのわけのわからない思いで、いざ出番が来た。一回目は右回転もつまく行き落下もなく満点。コーンルを切つて涙が出た。あとでコーチいわく、私が障害を飛ぶとき体が何度もおくれて馬がバランスをとるため注意深く足を上げて普段よりも足が上がつていたとのこと。まさに、災い転じて……だったのである。ジャンプオフは、あまりスピードをだすことが出来ず結果、位であったが、エクセル号と大切な試合で満点をとれたことが最高の思い出になった。馬は私の技術の足りなさを必死にカバーしてくれたのだった。

昨年思いがけずラッキー牧場（小淵沢）でエクセルと再会した。こをすぎていたが元気だった。乗りたかつたけど涙が出そうで散歩に連れ出して草を食べさせるのが精一杯だった。青春の全てをかけて馬に乗った日々であるが、四年間楽しく続けられたのもエクセルという愛馬のおかげだったと思う。おかげで今や乗馬は趣味を越えたライフワークとなつてしまったが、二度の飯より好きなものがあつて幸せである。



祝

「いななき」第14号発刊

緑鞍会会長

青木

昇（昭和16年卒）

祝

「いななき」第14号発刊

緑鞍会理事

馬場

隆男

（昭和17年卒）

祝

「いななき」第14号発刊

緑鞍会理事長

新城直樹（昭和28年卒）

祝

「いななき」第14号発刊

緑鞍会理事

相馬 潔（昭和33年卒）

各種ネームプレート・各種看板類
JR工事諸標類・機械彫刻
ブロンズ製橋銘板、歴板・機械加工

 **ミカド金属株式会社**

〒210 川崎市川崎区江川1丁目8番5号
TEL 044(277)4334代
FAX 044(277)3241

緑鞆会理事

赤 嶋 田米子 (昭和33年卒)

祝

「いななき」第14号発刊

緑鞆会理事

遠 藤 恭 輝 (昭和35年卒)

祝

「いななき」第14号発刊

緑鞆会理事

岩崎

修（昭和36年卒）

木製建具工事、アルミサッシ工事
襖・内装工事、家具工事

株式会社 **サトナ力建装**

代表取締役 里中郁男（昭和45年卒）

〒170 東京都豊島区駒込 6-34-2

TEL 03-3918-0336

FAX 03-3918-0037

現役より

旧主将挨拶

辻本達雄

前年度主将をやらせて頂きました辻本です。終わってみれば早いもので、私が青山学院大学に入学し、そして馬術部に入部してから約四年の月日が経とうとしています。この四年間つらかった事、うれしかった事など様々な経験をしましたが、とても充実した大学生活を送る事ができました。特にこの一年は主将という重責を任せられ、私の人生においても大変いい勉強になったと思っております。

私は馬術部に入部するまで、馬に触った事さえなかったため、主将を任された時は正直不安も少しありました。また部員もそれ程多くはなく馬術部を運営していく上で最初は心配でした。でも青学馬術部の部員みんなが協力し合い、一人一人が自分のやるべき事を認識し、仕事も人一倍するのでこの一年やって来れたのだと思います。

最後になりましたが、六平監督、田中コーチ、高森先生、そしてOB・OGの方々の御指導、御援助に厚くお礼申し上げます。

新主将挨拶

土橋寛太

私が今年度 主将をおおせつかりました土橋寛太です。つい先だってOBの方々に「お前が次の主将になるのか、この間一年生で入ったばかりだと思っていたのになあ」と言われました。私にとっても、この三年間は「あっ」という間のことでした。今年は、私達四年生にとっては最後の年であります。これまでの三年間に比べて、残りの一年間という期間が長くないということは言ってもありません。そのことを自覚し、「主将」という責任ある役職を遂行してゆきたいと思えます。

最後に、これまでの青山学院大学馬術部のよい伝統を引き継ぎ、それを生かして青学の名に恥じぬよう今まで以上の戦績を残すために、部員一人一人の自主性を主んじながら二丸となって頑張っていくつもりです。ので、OB・OGの方々の今まで以上の御指導・御援助のほどよろしくお願いたします。

高等部主将挨拶

広畑耕司

僕が小学校五、六年だった頃、テレビで馬術の試合をやっているのをたまたま観たことがありました。その頃は別に馬術に興味があつたわけでもなく、また、どのように試合の勝敗がつくのかもわからずにただホ

ーッと観ていました。

しばらくすると「青山学院大学」の選手（今では僕の先輩ですが、当時は全然知らないし関係のない大学生）が競技を行いました。ただそれだけのことなのに、なぜかそのことを良く覚えていて当時、「なんか青学で馬術なんかカッコーいなー。」などそんな風なことを考えていたように思います。馬に乗っていたのは男の人でまじめそうな人でした。他の競技者や学校は何も覚えていません。他の人にこんなことを言っても「だから。」と言われるかもしれませんが、たまたまその馬術の試合を観て、たまたまその人をよく覚えていてそして、たまたま青学の馬術部に今、僕がいることがただの偶然とは思えない今日このごろです。

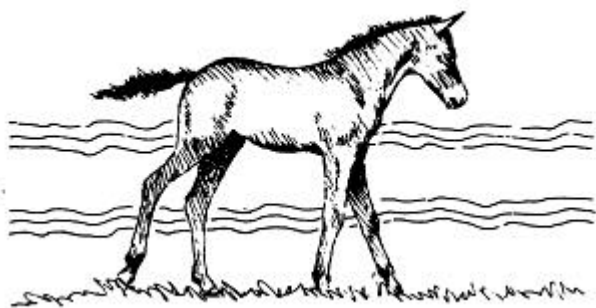
高等部副将挨拶

服部多映子

私は今まで動物を飼ってかわいがった経験がなく、私が入部した動機の中には「動物が好きだから」というのは含まれていませんでした。入部当初、「好きな馬いるっ」とよくきかれましたが、もちろん答えられるはずありませんでした。しかし、馬と一緒にいる機会を多く持ち、馬達を見ているうちに、その仕草一つ一つが決して意図されたものでなく、素直なものであることがすごく愛らしく、新鮮に感じ、そういう所が見えなかった私は曲がった見方しかできない人だったのかも知れない

と少し恥かしくなりました。

私が馬術部に入部して得たものは多く、それら一つ一つの見かけは小さなものでも私にとっては大きなものでした。ただ馬を見ていることだけでなく私には気持ちの栄養になっていました。私にとってそういう存在である「情」と出会えたことを今は誇りにり思っています。



部員紹介



辻本

ただ今より、平成六年度馬術部主将である辻本達雄くんについて書かせて頂きます。私、同期の副将を務めさせて頂きました北井裕子です。

彼が、一年生の時から自分のことを「背も高くて、顔もよくて、頭もよくて、言うことないやんけー」と自前の大阪弁でいつも言っていたことは、前回の「いななき」をご覧の皆様はごぞんじだと思えますが、そんな彼はこの部に欠かせない貴重な人物でした。

彼は大学に入ってから乗馬を始め、最初私たちの学年は男子三人、女子一人でしたが、他の二人の男の子がやめてしまった為に彼一人になってしまいました。しかし、女子二人（北井、藤森）に押されながらも男一人で頑張って、しかも四年の時には主将になり、この部を引っぱ

っていつてくれました。一般で入って来た彼が主将という重役を任せられ、そしてこの部の皆が彼についていつたのも彼がとてもほがらかな人柄だったからだと思います。

この彼が、馬術部生活の中で残っていた数多くの事柄を、「辻伝説」と呼ばれておりますがその中でもいくつか挙げますと、彼の家はふとん家さんでありながら、合宿中に皆が敷ふとんだと言っているにもかかわらず「これはかけぶとんやー」と言いはって敷ふとんをかけて寝ていたり、海に行き、「コンタクトレンズをしているのを忘れて海の中で目をあけてしまい、海からあがったら何も見えなかったことや、なんといつてもすごいのが全日本学生時代に、それまでの試合ではほとんど言っていないはご三反抗失権をしていたのに、本番では一回走行とも一落でかえってきてしまったことは青山学院大学馬術部に永遠に残される伝説となるでしょう。（彼は全日本の前に明治神宮にお参りに行ったらしい）

また彼は自意識過剰なところがあり、ちなみに私も全日本の一回走行の時にビデオ撮りをしていましたが、彼の出番の時に興奮のあまり撮

影をしながら「キヤー辻ー」とさげんでいるのも録音されており、後で彼がビデオを見た時に「北井俺にホしてるんじゃないの」と言っていたらしいですが、この場をお借りして言わせて頂きますが、「辻本くんそんなに気全くないから大丈夫ヨ」という訳で、彼がにくめない性格であることがお分かり頂けたと思いますが、最後に、彼はただ今、罰当37回、ドロブそつじ49回と、今までにない遅刻の記録保持者でございます。もし、全部なくすることができないと現金で返さなければいけないのですが、金額になおすと29万5千円相当になり同期の私も心配している次第でございます。

北井記



北井

私北井裕子は馬場馬術の選手として、ハットにノーメイクは似合わないをモットーに四年間メイクをおこたったことはありませんでした。

試合では下級生のみならず上級生にまでメイクをたのまれる程プロフェッショナルな腕を持っている上白負しています。(田中さんには主塚の男優だと言われ続けましたが……)ところで私の部活での仕事は副将と装蹄係でしたが、実際の仕事はたき火の火付け役とネズミ取りでした。ネズミに個人的なつらみは持ってはいないのですが、ネズミを見つけると体が知らないうちに走りだしているのです。もし皆さんのお宅にネズミがいたら私に連絡して下さい。どこへでも飛んでゆくでしょう。私の馬匹はブルーファルター号とブルーランボー号です。ランボーと共に恐怖の障害の試合に出場し、ファルターと共に関東学生のトップ目指して馬場馬術が

んばつてきました。四年間の馬術部生活は私の目指すオリンピックへ近づく糧になったと思っております。

藤森麻由記

私の名前は藤森麻由。そう、あのフジモリシスターズの真ん中なのです。三人の中では私が一番かわいいとみんなからよく言われます。私が入部した時は、お姉様の皆さんがいて、私が

四年の時に妹のこれまたが入部してきて、ちょっとやりずらい部分もありましたが、馬術部の四年間は自分でも一生懸命やって来れたと思うし、とても充実したものでした。特にこの一年は愛馬サンダーで障害に、アサで馬場にと両方の競技でいい成績をおさめることができてとても満足しています。



藤 森(麻)

クラブの仕事の方でも、実は主将よりも大変な会計を任せられ、馬術部の金庫番としてさいふのひもをしめるよう努力してきました。

一応学生馬術はこれで終わりですが、社会人になっても馬術は続けて、馬事公苑のアイドルとしてまた復活しますので、その時はよろしくお願ひします。

辻本記

土橋寛太君は国際政経学部国際政治学科の三年です。実家は赤坂ですが、現在網島駅前のマンションで一人暮らしをしています。

彼の担当馬はブチフル二号とブルーフラッグ号で、共に先日行われた全日本学生馬術競技大会に出場、優秀な成績を収めてきました。

こんな訳で上ほり調子の土橋君ですが、実はたいへん神経が細かく、試合前に緊張してしまうこともしばしばだそうです。ですが逆にこの



土 橋 松 山 初 山

神経の細かさ、馬のみならず、主将としての彼によい影響をもたらしてくれているであらうと思っ
ています。

さてこんな土橋君の目標は、全日本学生の一
走で、テレビ出演することだそうです。今年は
おしくも逃しましたが、来年こそ、この目標を
達成してくれるでしょう。彼と初山君と共にあ
と一年、頑張っていきたいと思しますのでよろ
しく願います。頼りにしています。

松山記

初山裕君は国際政経学部国際経営学科の三年
生です。現在日吉のマンションで一人暮らしを
しており、毎朝愛車BMWをさっそうと飛ばし
て馬場に通っています。

彼の担当馬はブルーオンワード号とブルージ
ーガ二号ですが、彼が馬匹になってから二頭共
すっかり物持ちになりました。特にジーガーは
とても練習馬には見えない位、小ざつぱりとし
た馬に生まれ変わり、彼のジーガーへの愛情の
深さをつかがい知ることが出来ます。

普段はごく平均的大学生の初山君ですが、こ
の間の打ち上げの席で、見事なエンターティナ

ーぶりを発揮してくれました(うーんあの弾け
ようは忘れられませぬ)

今年も副将、主務として我が馬術部を引っば
っていつてくれるであらう初山君。彼と土橋君
と共にあと一年、頑張っていきたいと思いま
すのでよろしくお馬いします。頼りにしています。

松山記

私は松山久美です。毎朝 一時間半も電車に
揺られながら通っています。キーン(大変だ
あつ、思わず癖で奇声を発してしまつた。黙つ
ていけば、石田あゆみそっくりの清楚な感じが
ブンブンと漂よっているお嬢様なのに、私つた
らイケナイわ。

ところで、私の馬匹はオラシオン、キンシ、
アサの三頭です。三頭とも好きですが、オラシ
オンはちょっと特別です。なぜなら、一年生の
時からオラシオンに乗ることが多く、試合でも
いつもペアを組んで出場しているからです。今
日の私が存在するのも、全てオラシオンのおか
げと言っても過言ではないでしょう。オラシオ
ンは他の人が乗っても、やる気を出さずにトロ
トロ歩いているのに、私が乗ると私の愛情が伝

わるのか(部員の皆様によると、私はおしりが
なくせに、推進力は人一倍すごいらしい)ピュ
ンピュンと馬場中をカツ飛ばしています。

これからも愛馬オラシオンとがんばっていく
のでよろしく願います。

キーン。

初山記



弥 登 佐 藤

国際政治経済学部国際経営学科二年佐藤恵子
は、皆から、ケイちゃん と呼ばれる馬術部の
人気者です。

彼女は、幼小の頃イギリスに住んでいた為英
語が堪能で、国際試合の時は通訳で大活躍

馬術の成績も優秀で、今年女子自馬馬術大会で見事に優勝。小さな体でも大きな馬を動すパワーは、人並以上。今、新馬調教に夢中です。

又、この二年間、無遅刻無欠席という大記録を更新中で、とにかくすごく頑張り屋さんの

「ケイちゃん」でした。

皆さん、佐藤恵子を見かけたら、気軽に「ケイちゃん」もしくは「チャンプ佐藤」と声をかけて下さい。

弥登記

「フラッグ フラッグ僕はフラッグ女の子にモテモテ」と、毎朝6:30、私達青山学院大学馬術部員は文学部教育学科二年の弥登あゆみさんの美声で作業がスタートできる幸せ者です。彼女は当初音楽関係の大学へ進みたかったらしく得意の作詩作曲と8オクターブ出すことができる噂の美声で私達を楽しませてくれます。

しかしこの私の友人のあゆちゃんこと弥登あゆみさんはフラッグの歌を陽気に奏でている反面非常に神経質な面ももつ女性です。彼女の神経質とも言えるほどのキマジメさは特に「服装」に表されます。馬事公苑へ試合に行く時のメイクの素晴らしさはまさに第1の北井さんと思わ

せるものがありますし、トレーナーにしろキュロットにしろ汚いものはもちろん、上下の色彩関係が不適切な時は周囲の者まで注意をつけます。騎乗面において彼女は最近では障害も馬場も表彰台から降りたことのないアイドルライダーです。全く馬を知らない者でもあゆちゃんが乗っていれば足を止めて見とれてしまう程です。

今、関東学生で最も注目されているライダー弥登あゆみを皆さんこれからもよろしくお願ひします。

佐藤記



川村 藤森(香)
川俣 清藤

私は国際政治経済学部経営学科一年の清藤裕

子です。人の何倍も頑張るといふ特性をもっている為、夏合宿中、馬に膝を蹴られた後も伸脚状態で草刈りをし、グラウンド何周かの代わりに腹筋60回をクリアし、仕舞いに馬にも乗って充実した中に厳しさが光ると有名な北井さんレッスンまでも受けてしまった私ですが、まさか靱帯が傷ついていたとは思いませんでした。

最近、他大学の間で青学の杏樹と有名な私に可愛いがられている幸せな馬はブルーファルター号とブルーサンダー号です。ファルターは豪快な体つきと同様に、私の腕をガブリガブリと舐めまわして甘えてきます。そんなファルターが退屈してしまった日には恋しさのあまりに青森ナンバーの愛車を飛ばして追いかけて行ってしまう程大好きでした。サンダーのしっぽからは私の愛の証とも言えるヴィダルサソンの香りが漂ってきます。近々杏樹の騎乗姿をお見せする事になりますが見とれない様お気をつけ下さい。

藤森香弥記

僕は、国際政治経済学部国際経営学科の川村通です。まるで馬場を我が家のようになり、一週

間のうち六日間ぐらゐを馬場で寝泊りしている僕はいつもどつも一つを合言葉に笑顔で颯爽と登場します。僕の趣味というより「仕事」は、パチンコと競馬です。特にパチンコでは生活費を稼いでいます。でも僕は、みんなからは、ちょっといい加減というよりは大きっぱな性格だと言われるはん面、まじめで顔がいいとも言われます。

こんな僕ですが、馬術部に入ってまだ半年ちょっとというのにもう試合に一回出場し、一回も減点ゼロの満点という成績で書字の秘密兵器とまで言われております。これからも愛馬ブルームシクことアストロ号で師匠の辻本さんにも負けないくらい練習し、関東学生で一番を目標として毎日朝早くからがんばっていきます。これから書字の秘密兵器川村通をよろしくお願ひします。

川俣記

私は、栃木の山奥からやってきた川俣亮介です。いやあ、東京は、すごいですね。最初に

来た時、電車は待たずに来るし、道路一杯に車は走ってるし本当いろんなことに驚かされました。今日は、十ヶ月たつて成長した僕のシテイーボーイぶりをほんの一部みんなに教えてあげましょつ。

今、僕がはまっていることは、レンタルビデオに行つてAVを借りて観ることです。AVって言うてもアニメビデオのことですよ。そうですね、今一押しのはビデオは聖闘士星矢ですね。他にはまっていることと言えば、地元にはなかったコンビニエンスストアを見てまわることですかね。本当いろんな物が売つてただで楽しいですね。とは言つものの、やっぱり無理しているせいかストレッチがたまつてしまいます。今は、ヒマさえあればムギチヨコを食べているつてかんじですね。そんなわけですから四月の時と比べると10kgぐらゐの体重が増えています。まあ、これから部の仕事を今以上にバリバリやつて減量したいと思ひます。

川村記

私がこれから紹介する人物は、すごく細い小さい。好きな馬も似ている、彼女の愛馬は

LIFE・ONLINE 馬の世話も、人の世話

も良くしてくれる気の効いた子!? である。その割に、自分で自分の事を、マライア・キャリーに似ているだの、ジュリアロバーツに似ているだのとよく騒いでいるノイジー人間である。そんな彼女は、ビートがやけに似合っている。もう誰がお分かりでしょう。そう、藤森三姉妹の末女こと藤森香弥ちゃんです。彼女とは、部活では四ヶ月、友人としては十ヶ月の付き合いになる。彼女のしがなないジョークを毎日のように聞かされた日々も早いもので十一ヶ月目に入つてしまつている。あまり面白くないギャグでも、無理して笑顔で耐えてきた私は、自分を「なんて偉いんだ」とつくづく思つた。そんな彼女でも私の掛け替えのない友人である。彼女の笑顔は、母譲りというか姉譲りというか非常に人を引き寄せる何かがある。彼女の向日葵や太陽にも負けない笑顔に、私は、惚れている。

清藤記



馬匹紹介



ブルーサンダー

ブルーサンダー

「みなさん、もしかしたらさっと思っただ方がいらっしやをかしれませんが、実は彼バンビだったのです。バンビが故に、あのジャンプ力、あのパカっぱしり、そしてあのお尻のはんてんがあるのです。」「と数年前まで言われていた彼も、今ではすっかり年をとり、毎口馬場の口なたぼっこを楽しんでいます。」

最近はどうやら臆病にふけることがとても多くなり現実と想像の世界もハッキリしないらしく、佐藤を麻由さんと間違っすり寄ったりするコトさえあるくらいです。しかし、いくら年をとったとはいえ、試合となると穏やかな老人から一気に活気あふれるフレッシュマンに変わります。頭にカーツと血がのぼり、もう何も見えない、何も聴こえない、俺には目の前にある障害を越えるだけだ、と言わんばかりの勢いで雲を分けるように次々と障害をこなしていきます。

私生活の面での彼は大変な警沢者と言えるでしょう。特に食生活の面で警沢ふりを炸裂し、美味しい物を少量しか食べないのはもちろんのこと、すっかり当番の者が彼の食事を、ダブ飼いにするのを忘れた日には、彼は当然の如く飼いを残し、すぐにガールフレンドの麻由さんに「麻由さん、俺、今日ダブじゃないから食べないんだ」と涙ながらに訴えます。(つげロサンダー)

まあこんな彼ですが「青字あるところにサンダーあり」という言葉を作った程常に青字の看板馬として活躍してきました。年老いた彼を精神的にも肉体的にも支えあって生きていくことが私の今後の部活動に対する抱負であり目標です。

みなさん、応援よろしくお願いします。

ブルーランボー

僕の名前は、ブルーランボーと言って何人かの人にはランランって呼

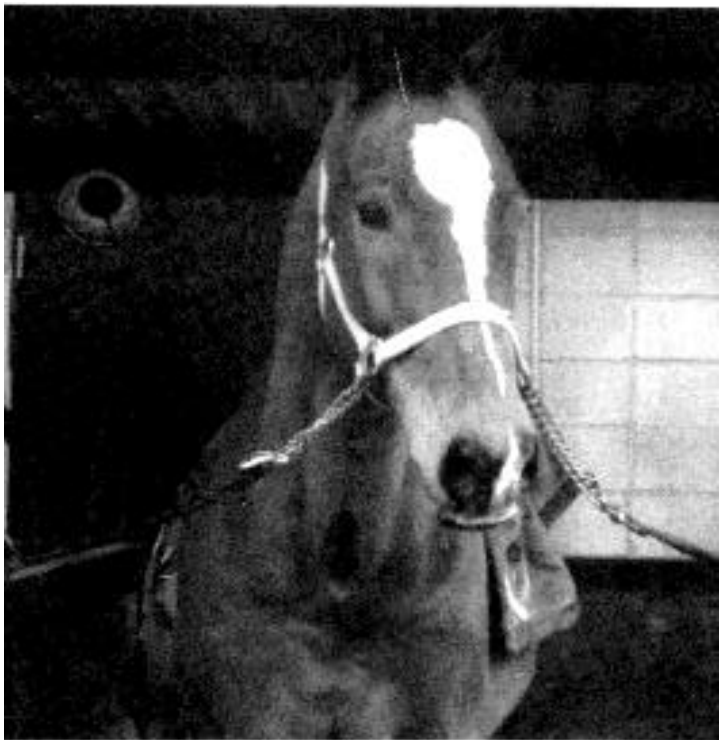


ブルーランボー

ばれているんだ。僕の性格は、結構おとなしくて穏やかなんだ。でも、皆さんが僕を見るとポーツとしているなんて言っただよね。(結構そうかも?) しかし皆さんが言うようにポーツとしている時はかりではないんだ。エサの時間ともなると馬が変わったように一目散に餌いオケに顔を突っこんでしまっんだ。そうしたらもう最後、何をしてもしエサから顔をはなさないんだよ。

「こんな僕だけが、いざ障害をやると障害を落としてしまっ。(ど)っしてたさう?)」でも、やっと最近垂直が上手く飛べるようになったんだ。ちょっと障害が高くなるとおどろいてしまい止まりたいんだけど止まると上に乗ってる人におこられてしまい結局は飛ぶはめになってしまっの

さ。こんな僕ですけど、これから他馬に負けないようにガンバリますのでよろしくお願いします。



ブルーフラッグ

ブルーフラッグ

「フラッグ、僕はフラッグ、女の子にモテ×2 の他に沢山のデーマソングを持つ、フラッグことブルーフラッグ。オレはこのボス。オレに逆う奴は痛い目にあうぞ。実際オレのキックを味わった者はいかに練習中であっても、人を乗せたまま逃げちまっのぞ。」

ちなみにオレ、何でも食つから嫌いな物があつたら食入てやるよ！
あつても、レモンは駄目だ！ アレだけは苦手なんだ。

でも、こんなオレに好きな女ができまっただんだ。馬じゃないぜ！
人間の女さつ。えっ誰かつて？ それは、はずかしくて言えやしねえ。
まっ、オレの目線を見れば一発で分かるさ。そいつのせいで、最近大人
しくなつちまつた。しかし、練習はちゃんとしてるし、馬場馬らしく
なつた と評判だから、もっと頑張つちゃうぜ！ それじゃあ、この
「いななき」を読んだ人にだけ、オレの恋人のヒントを与えよう。ヒント
「ユアトミだ。分かつたかな？」

プチブルー

僕ちゃん、アミーゴJr.去年、南国九州から上京。「プチブルー」とし
て、関東学生に流星のごとく現れたのさつ。

僕は、ある名門乗馬クラブで生まれました。ママの名前も「アミー
ゴ」。ママは昔、オリンピックにも出てるんだ。

ところで、僕ちゃんの趣味は、馬事公苑のゴミ箱をのぞいて歩く事。
よく人から、犬みたい って言われちゃうの……。

こんな僕だけど、いざ競技に出たら負けないよ。僕ちゃんのジャンプ
力はママ譲り。天才的障害センスを持つてるの。

けど、馬場は全くダメ。だって難しくて、僕ちゃん。覚えられないの
ゴメンネ。

そうそう、僕ちゃん。最近、初めてお砂糖をもらつただけど、おい
しいね。僕ちゃん、食べず嫌小の物多いの……。

あつ、もつ子供は寝る時間だから、僕ちゃんも寝なきや。それじゃ
あまた今度ねバイバイ。



プチブルー

ブルーマジック

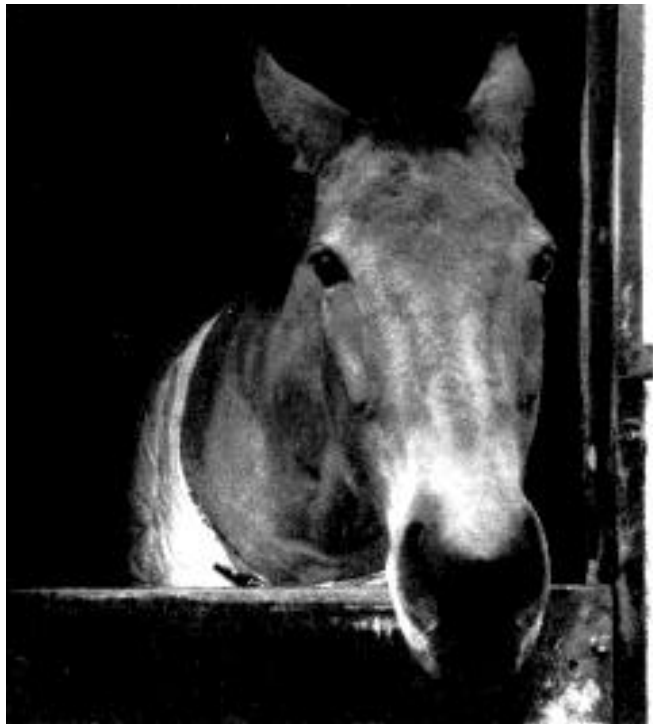
「いやあ今年は大変な年だったよ」おつと先に自己紹介をしなくちゃ
な。俺の名はアストロ、馬事公苑ではブルーマジックと呼ばれてるん
だ。そうそう何が大変だったかっていうとな、あれは十月くらいだった
かなオレもつ少しであの世いきだったんだ、せん痛でな。原因は病院送
りにした清藤の呪い？じゃなくてオガの食べすぎらしい。まったく我な



ブルー・マジック

がら情けないぜ。まあ、みんなの心援まる三腸のおかげで今はピンピンしてるけどな。一応ここで礼でもいっておくか「ありがとう」

こんなオレにもいいことはあったんだぜ。それはな約一年半ぶりに、青学生と行く馬事公苑ツアーに参加できたことだよ。なんと久しぶりにコースを回って楽しかったよ。でもみんな俺の力を思いだしたよっだし本当によかったんじゃないかな。再びオレの時代が来るのもそう遠くはないんじゃない。おつともつこんな時間が、明日も早いからもつ寝なくちな。これから俺のことをかわいがってくれよ。それじゃまた。



ブルー・ジーンズ

ブルー・ジーンズ

数々の馬場馬術競技の試合で華麗な歩様を披露してくれているアサコとブルー・ジーンズ号。その活躍は皆さん御存知の通りですが、今日はそのアサ君の舞台裏、綱島馬場での彼について書きたいと思います。

才能豊かで賢いアサ君ですが、どうも愛想のない所があります。加えて装鞍の際、腹帯をしめようとすると自分自身の胸にガブガブかみつくという、マンヒステックな癖を持っており、高校生の中には彼を恐れている者もいるようです。

そんなアサ君にもお茶目な所がありまして顔をふいてやると、いつの間にかタオルの端を口の中に入れてもぐもぐやっており、いつものケールな顔はどこへやら、満ち足りた表情を浮かべて大人しくしているのです。こんなふうに、身近にいればいる程素敵な表情を見せてくれる彼と共に、これからも頑張っていきたいと思しますので、応援よろしくお願ひします。

ブルー・ファルター

まあ、馬乗りで俺の名を知らないものはないと思うけど、一応俺の名はファルターていうんだ。毎日俺の大好きな親分の北井さんを筆頭に子分の佐藤と清藤（最近あんまり見ないけど）を率いて毎日綱島で楽しく暮らしているのさ。俺も北井さんも放牧が一番好きなんだけど試合前は妙に燃えちゃってガンガン練習しちゃうんだ。でも俺がちょっと本気を出して得意の伸長速歩で斜手前を変えをやるにあまりの素晴らしさにみんな心を打たれて練習どころじゃなくなっちゃうんだ。困るよなあ。

でも真剣な話として俺と親分の伸長速歩は他校の学生からも、キカイダーコンビと言われるくらいなんだ。こんな非の打ちどころのない俺だけど一つだけ悩みがあるんだ。それは極度の「フケ性」なんだ。子供達ができちんと手入れをしないからという噂もあるんだけど、もう俺の体はフケからできているんじゃないかと思つくらいフケが出てくるんだ。そう、あんまり言いたくないけど実は馬場では、フケ次郎と呼ばれてるんだ。失礼しちゃうよなあ、全く。



ブルー・ファルター

まあ馬事公苑とかで見かけたら応援宣しく。俺ががんばっちゃうヨ

ブルー・ジーガー

こんにちは、ジガ夫ことブルー・ジーガーです。昔々競馬場から遠路はるばる青学へやってきたわけですが、競争馬時代同様いまいち大成することができませぬ。これといつのも僕の気が小さいからでしょうか？
どうも障害を目前にすると体が前にでなくなってしまうのです。でもこんなときには皆さんの愛のムチを一発いれてやって下さい。そうすれば僕の奥底に眠っている父ハイセイコー譲りの闘争心に火がつきどんな障



ブルー・ジガー

害でも飛べるよつになるはずです……たぶん。

そう言えば最近僕引越したんです。なんと今まで住んでいた最果ての外馬房から超高級テラックス馬房に移ったんです。あまりの好待遇ぶりにちよつと困惑きみです。ようやく僕の主要さに気付いてくれたのでしょうか。でも「そんなはずあるわけがない」とちよつと弱気に考えます。警かいてしまいついみなさんにかみついてしまいます。これ以上ストレスでしつぽを減らしたくないし誰かぼくを安心させて下さい。あと僕のテーマ曲を募集しています。応募してくれる人は馬匹の朧山さんまでお願いします。



ブルー・スティンガー

ブルースティンガー

僕の名前はブルースティンガーと言います。皆さんからは、キンシとかキンゾーとかキンキンとかキンタンとかいろいろ呼ばれて分けがわかりません。でも僕は、まだ若いのに、見た目よりは年寄りに見られてしまい体力もないし休も弱くあまり良い所はありません。しかし、こんな僕でも高校生には、多少人気があります。いろいろ砂糖とか人参とかシヤンプーとかをいただきとてもうれしいです。

このような僕は、週末ともなると高校生の練習馬として一、二を争う

ほかがんばっています。平日も練習馬としてがんばっていますがたまに試合に出ると、急に気が小さくなってしまい結果は今一つ……。時々勇気を出していくと成績がよく、ほつびをもらえますが、ここ一番の試合になると……。

こんな僕ですけど可愛がってくれる人を大募集しているのでよろしくつたらの僕を可愛がってください。



ネイチャン

ネイチャン

ネイチャンことハヤテエイコウは競争馬時代をおえ、青学馬術部で

「第一の人生」ではなく「第二の馬生」を送っています。はじめのころ

は、馬場馬として運動をはじめていましたけど今では、障害馬として毎日運動にはげんでいます。ネイチャンの普段の様子は、特に変わったことはいりませんが、あえて言うならばみんなから「くさいっ！」といわれることです。いつも朝作業をする時に厩舎から出し繋ごうとするところ、鼻を差すようなシャネルの「番以上のごくくきな香り」がただよいんながネイチャンからはなれていきます。

そんなネイチャンでも数人ではありますが影ながらのファンにかわいがられています。しかしネイチャンはものすごく気が弱く、ちょっとした物音にも弱くおびよう者です。結構厩舎の中で物音におどろき頭をぶつけて自分でぶつけたのにあたかも人がいじめたみたいに厩舎の角でおびえています。

そんなネイチャンでも一日でも早く試合に出られるようにがんばってもらいたいです。

ブルーオンワード

青学の主戦馬であるブルーオンワード号は、乗用馬になる以前は新潟記念等のBIGな競馬のタイトルを獲得する程の優秀な競走馬でした。

その時に残した名前はオンワードミズリーでした。そして現在彼は部員から「ミズーリ」又は「ミジユ」と呼ばれ、背から可愛いがられる毎日を送っています。

そんなミズーリのある一日を紹介します。まだ馬着を着ないと寒い頃、



ブルー・オンワード

ミスリーは部の中で一番綺麗で暖かいブルーの馬着に身を包んで朝時頃目覚めます。そして眠い目をこすりながら泊りの人が朝ごはんをくれます。そして嫌いなヘイキューブ以外を食べ終わる頃に部員が作業を始めます。すぐに終わってしまうのでミスリーは早速仕事です。主戦馬だけに練習メニューは高度なものばかりです。終わった後は疲れを癒してあげるつもりで綺麗にしてあげます。後は食べて寝てポーツとして繰り返しですが、ミスリーはいつも幸せそうな目をしています。

ブルーライト

青子の主力馬として試合でいつも活躍している姿をみせてくれる一方

綱島での練習では高等部生から大学生までたくさんの方がお世話になり、そしてファンも多かったブルーライト号（オラシオン）が骨折の為に引退することになりました。16歳という年齢まで、練習に試合にと忙しく毎日を過ごしてきた彼に、後はのんびりと幸せに過ごせるよう部員一同心より願う次第であります。

オラシオンとの思い出

中山 陽子（平5年卒）

かねてより私は、オラシオンが馬術部を引退する時には彼を引き取り、面倒を見たいと思っていた。彼の引退を内心、心待ちにしていたのだが、春先に行われた部戦で今年16歳になるとは思えない彼の活躍ぶりを見て今年いっぱいは無理だろうと、彼の元気な姿に安心すると共に、そこまで頑張らなくてもいいのに...と思うたりしていた。だから、オラシオンの突然の骨折の連絡には心底驚き、どう対応すべきなのかと、慌ててしまった。

オラシオンは、私が高等部馬術部を引退した年の冬に入厩した馬である。今でこそ乗り手に拍車傷を作られても暴れずに我慢するようにはなったが、初めの頃の彼は、動きがやたら重いくせに拍車が入ると嫌がって跳ねるような馬だった。私は練習の度に落とされ、ひどい時には雨でぐちゃぐちゃの馬場に、1回の練習で立て続けに産毛も落とされたりした（乗っても乗っても落馬したという訳である）。下級生の練習となると

必ず登場する彼が、恐くて仕方がない存在になった。もともと私は鹿毛で細目の馬が好きだったので、チビで小肥りの黒鹿毛の馬は好きになれなかった。馬匹になった時には、余りにもシヨックで不覚にも目に涙を浮かべてしまった位だ。しかしト不思議なもので、毎日世話をしていると段々とオラシオンに情が移り、その上、入部以来ずっと試合で失権続きたった私を満点に導いてくれたこともあって、私にとつて彼はとても大切な馬になった。仙痛になりやすく、足をすぐ跛行したりして始終ハラハラさせられたが、それ以外の面では信頼できる素晴らしい馬だった。最後の女子自馬では賞状を頂くことができたが、それまでの試合において、乗り手の私の技量不足で幾度となく入賞を逃してしまったことを悔むと同時に、いつも一所懸命に頑張ってくれた彼に対して、申し訳なかつたという気持ちで一杯である。私に色々なことを教えてくれた彼に、とても感謝している。彼を引き取りたいという思いは今も変わらず抱いているのだが、事情によりできなくなってしまうた。彼が静かな余生を送れることを願つのみである。



平成7年度 活動予定

4 月	7 (金) ~ 9日 (日)	東都学生馬術大会
5 月	25 (木) ~ 28日 (日)	関東学生選手権大会
6 月	15 (木) ~ 18日 (日)	関東学生馬術大会
	30 (金) ~ 2日 (日)	全日本学生選手権
10 月	21 (土) ~ 22日 (日)	関東学生秋季大会
	30 (月) ~ 5日 (日)	全日本学生馬術大会
11 月	25 (土) ~ 26日 (日)	関東学生女子自馬馬術大会
12 月	1 (金) ~ 3日 (日)	関東学生争覇戦

平成6年度 馬術部試合結果報告

大会・競技名；	出場者（馬）名	順位
関東学生馬術新人競技大会		
個人	高 橋 良 輔（ブルーオンワード号）	12
	藤 森 麻 由（ブルーサンダー号）	16
団体		9
東都学生馬術大会 団体		5
関東学生馬術選手権大会	土 井 裕 子	8
女子選手権大会	土 橋 寛 太	8
関東学生馬術競技大会		
馬場馬術 個人	北 井 裕 子（ブルーファルター号）	6
	藤 森 麻 由（ブルージーンズ号）	9
	土 橋 寛 大（ブルーフラッグ号）	15
団体		4
障害飛越 団体		5
関東学生女子馬術競技大会		
馬場馬術 団体		優腰
個人	佐 藤 恵 子（ブルーファルター号）	1
	弥 登 あゆみ（ブルーフラッグ号）	5
	藤 森 香 弥（ブル ジ ーンズ号）	6
障害飛越 個人	弥 登 あゆみ（プチ・ブルー号）	6
全日本学生賞典障害飛越競技大会 団体		5
全日本学生賞典馬場馬術競技大会 団体		3
個人	北 井 裕 子（ブルーファルター号）	3

編集後記

発刊させることを計画してからずいぶんと時が経過いたしました。が、
「いななき」第十四号を完成させることができ、とてもうれしく
思います。これも我々現役の力のおよばないところを大いに助けてく
ださったOBの方々の御指導・御協力のおかげでございます。特に広告
を出していただいた方や忙しい中原稿を書いて下さった方や我々に不
慣れな編集を手伝って下さった方々の御協力には感謝いたしております。
本当にありがとうございました。

みなさまが、この冊子を見ることによって昔の出来事を思い出されたり、
現在の部の状況を御理解してくだされば、我々もとてもうれしく思
います。次号を発刊する際には、よりみなさまに喜んでいただけるよう
な内容にするために、今回の経験を基にして頑張りたいと思っております。
その際には御協力お願い致します。

最後に、これからも勉強と馬術を両立させて、それらをより一層向上
させるよう努力いたしますので、ますますの御指導、御鞭撻の程よろし
くお願い申し上げます。

「いななき」編集委員一同

非 売 品

いななき 第14号

1995年6月25日発行

発行者 青山学院大学体育会馬術部・緑鞍会
住所 〒223神奈川県横浜市港北区綱島上町1-1
電話 045(543)9339

印刷所 株式会社構林社
住所 〒105東京都港区浜松町1-2-15
電話 03(3431)1774

オホーツク圏で躍動する
スーパーマーケットチェーン



株式会社 **イチロ**

北海道北見市卸町3丁目3-3

☎0157-36-5121

昭和33年卒業 渡辺 充

株式会社 カネハン商店

建材部 〒283 千葉県東金市田間 2227

TEL 0475(52)2148

石油部 〒283 千葉県東金市田間 1964

TEL 0475(52)3544

土 屋 敦 (昭和54年度卒)



だいたいい
毎日、
淡麗純米。



この、淡麗純米という
名前の酒は、
六甲の自然水と、
米だけで丁寧につくっ
た純米酒です。
味わいすっきり、
飲みやすい。
ふだんのおかずに、
しっくりなじむ。
だから、僕は、
だいたい毎日、
淡麗純米なのです。

六甲の
自然水仕込み

淡麗純米

お酒は20歳になってから。

サケカップ180ml詰 220円・300ml瓶詰 370円・1.8L瓶詰 1,950円・サケパック1.8L詰 1,930円・サケパック900ml詰 980円(価格はいずれも標準小売価格で消費税別です。)

米・水・人が原点です
白鷲酒造株式会社